

5月の連休後半、スイスのサン・ガレン大学で行われたサン・ガレン・シンポジウムに参加した。私は今回が初めての参加だったが、このシンポジウムは第39回を数える伝統のある会議だ。主催者はサン・ガレン大学の学生で、世界中の大学生をエッセー・コンテストにより選抜、招待する一方、政治家、一流企業の経営者、学者も招待して、基調講演

サン・ガレン会議

や分科会の講師をお願いしている。今回はスイスのメルツ大統領も基調講演を行った。

2日半にわたり参加者が泊まり込むシンポジウムであるが、学生と講師たちが、質疑応答の時間や休憩時間、昼食、夕食の時間を通じて話し合える環境が整っている。日本から参加の学生もよく会議に溶け込んでいた。

日本の大学からも多数の応募があったようだが、採用された学生数は、日本に割り当てられた上限には達していない。やはり、英語

東京大教授

伊藤 隆敏

でエッセーを書くのは苦手なのか。

日本人自身は、英語の読み書きはできるが、話す英語は不得意、と思っている。しかし、これは正しくない。



英会話は、留学などで英語環境に入れば、ほとんどの人はそれなりに上達する。英語環境で暮らしただけでは上達しないのが、英語で文章を書く、という

ことだ。

私も三十数年前に留学したとき、最初の2年間で日常会話や授業での英語は急速に上達したが、文章を書く能力は遅々として上達しなかった。それでも、私の書いた文章を親切に添削してくれる友人たちがいたことは幸いだった。会話とは違い、書いた英語を添削できる能力を持つ英米人は少ないからだ。

英会話を学習するのは初等中等教育であり、日本の大学で本当に磨くべきは、英語を書く能力である。